

2024
ズバリ! 的中



古文

中央大学

入試問題本文が一致、
かつ問い内容が複数個所的中

入試問題

2月14日実施 経済学部
学部別選抜 I
三〔問一〕(1)〔問五〕

河合塾

高3 II学期
古文TJ テスト
第八講 問一(2)問八

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(30点)

そもそも源三位入道、年ごろ日ごろもあればこそありけめ、今年いかなる心にて、謀叛をばおこしけるぞといふに、平家の次男、前右大将宗盛卿、すまじき事をし給へり。されば人の世にあればとて、すぞろにすまじき事をもし、いふまじき事をもしふは、よくよく思慮あるべき物なり。

たとへば源三位入道の嫡子、仲綱のもとに、九重にきこえたる名馬あり。鹿毛なる馬の、ならびなき逸物、乗りはしり心むき、又あるべしとも覚えず。名をば木の下とぞいはれける。前右大将これを伝へ聞き、仲綱のもとへ使者たて、「きこえ候ふ名馬を、み候はばや」と宣ひつかはされたりければ、伊豆守の返事には、「さる馬はもつて候ひつれども、このほどあまりに、乗り損じて候ひつるあひだ、しばらく勞らせ候はんとて、田舎へつかはして候ふ。」とて、その後沙汰もなかりしを、多く並み居たりける平家の侍ども、「あつばれその馬は、をととひまでは候ひし物を、「昨日も候ひし、「けさも庭乗し候ひつる」など申しければ、「さては惜しむござんなれ。にくし、こへ」とて、侍して馳せさせ、文などしても、一日がうちに、五六度、七八度など、こはれければ、三位入道これを聞き、伊豆守よび寄せ、「たとひこがねをまろめたる馬なりとも、それほどに人のこはう物を、惜しむべき縁やある。すみやかにその馬、六波羅へつかはせ」とぞ宣ひけれ。伊豆守力およばで、一首の歌を書きそへて、六波羅へつかはす。

恐しくはきてもみよかし身にそへるかけをばいかがはなちやるべき

宗盛卿、歌の返事をばし給はで、「あつばれ馬や。馬はまことによい馬でありけり。されども、あまりに主が惜しみつるがに、くきに、やがて主が名のりを、金焼にせよ」とて、仲綱といふ金焼をして、むまやにたてられけり。客人来て、「きこえ候ふ名馬を、み候はばや」と申しければ、「その仲綱めに、鞍おいてひきだせ、仲綱も乗れ、仲綱も打て、殿れ」など宣ひければ、伊豆守これを伝へ聞き、身にかへて思ふ馬なれども、権威について、とらるるだにもあるに、馬ゆえ仲綱が、天下のわらはれくさとならんずるこそやすからねとて、大きにいきてほられければ、三位入道これを聞き、伊豆守にむかつて、「何事のあるべき

次の文章は、「平家物語」の一節で、源三位入道頼政が打倒平家のための謀叛を起こすにいたった原因となる出来事が語られている。これを読んで後の問いに答えよ。

そもそも源三位入道、⁽¹⁾年ごろ日ごろもあればこそありけめ、今年いかなる心にて謀叛をば起こしけるぞといふに、平家の次男、前右大将宗盛卿、すまじき事をし給へり。されば、⁽²⁾人の世にあればとて、すぞろにすまじき事をもし、いふまじき事をもしふは、よくよく思慮あるべきもの也。

⁽³⁾たとへば、源三位入道の嫡子、仲綱のもとに、九重にきこえたる名馬あり。^(a)鹿毛なる馬のならびなき逸物、乗り走り、心向き、又あるべしとも覚えず。名をば木の下とぞいはれける。前右大将、これを伝へ聞き、仲綱のもとへ使者を立て、「きこえ候ふ名馬を見候はばや」と宣ひつかはされたりければ、伊豆守の返事には、「さる馬はもつて候ひつれども、このほどあまりに乗り損じて候ひつるあひだ、しばらく勞らせ候はんとて、田舎へつかはして候ふ。」⁽⁴⁾さらんには力なし」とて、その後沙汰もなかりしを、多く並み居たりける平家の侍共、「あつばれ、その馬は、をととひまでは候ひしものを、「昨日も候ひし、「今朝も庭乗りし候ひつる」など申しければ、「さては惜しむござんなれ。にくし。乞へ」とて、侍して馳せさせ、文などし

ても、一日がうちに五六度、七八度など乞はれければ、三位入道これ聞き、伊豆守呼び寄せ、たとひ黄金をまろめたる馬なりとも、それほどに人の乞わう物を惜しむべき様やある。速やかにその馬六波羅へつかはせとこそ宣ひけれ。伊豆守力およばで、一首の歌を書き添へて六波羅へつかはす。

恋しくは来ても見よかし身に添へるかけをば⁽⁶⁾いかが放ちやるべき

宗盛卿、歌の返事をばし給はで、「あッばれ馬や。馬はまことによい馬でありけり。されどもあまりに主が惜しみつるがにくきに、やがて主が名のりを鉄焼にせよ」とて、仲綱といふ鉄焼をして、むまやに立てられけり。客人来りて、「きこえ候ふ名馬を見候はばや」と申しければ、「その仲綱めに鞍おいて引き出せ、仲綱め乗れ、仲綱め打て、はれ」など宣ひければ、伊豆守これを伝へ聞き、「身に代へて思ふ馬なれども、⁽⁷⁾權威について取るるだにもあるに、馬ゆへ仲綱が天下の笑はれぐさとならんずるこそ安からぬ」とて、大きに憤られければ、三位入道これを聞き、伊豆守に向かつて、⁽⁸⁾「何事のあるべきと思ひあなづつて、平家の人共が、さやうの痴事をいふにこそあんなれ。その儀ならば、命生きてもなにかせん。便宜をうかがふてこそあらめとて、⁽⁹⁾わたくしには思ひ立たず、宮（高倉宮以仁王）を勧め申したりけるとぞ、後にはきこえし。

と、思ひあなづつて、平家の人どもが、さやうのしれ事をいふにこそあんなれ。その儀ならば、いのち生きてもなにかせん。便宜をうかがふてこそあらめ」とて、わたくしには思ひもたず、宮をすすめ申したりけるとぞ、⁽¹⁰⁾後にはきこえし。

〔平家物語〕

注 源三位入道……源頼政。 九重……ここでは都の意。 伊豆守……仲綱。

六波羅……平氏の邸宅があった地。 金焼……鉄の焼き印を押すこと。 宮……高倉宮、以仁王。

〔問一〕 傍線(1)(2)(4)(5)の解釈として、もつとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

- (1) 「人の世にあればとて」
- A 平家の世が続くかぎり
 - B 人の世の道理にしたがつて
 - C 平家が栄えているからといって
 - D 源平の争いの中ではよくあることでも

〔問五〕 傍線(1)「何事のあるべき」の解釈としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 源頼政たちに何かをしたら、平家一門に大変なことが起こるかもしれない。
- B 平家盛と源頼政の結びつきは強く、何があっても問題にはならないだろう。
- C 源平の争いの中では、馬をめぐる争い程度のこととは不問に付されるだろう。
- D たかが馬一頭のこと、源頼政や仲綱が本気で怒ることはないだろう。
- E 源頼政や仲綱に何をしても、平家一門に向かって何もできないだろう。

問一 傍線部(1)～(3)の語句の意味として最も適当なものを、各イ～ニの中から一つずつ選び、その符号を記せ。

- (2)
- イ 時機き栄えているからと言って、
 - ロ 世間に認められているからと言って、
 - ハ 在世中のことだからと言って、
 - ニ 時流に乗りたいたいからと言って、

問八 傍線部(8)「何事のあるべきと」を、前に言葉を補って、丁寧に解釈せよ。